

11  
2017

あなたをプラスの人生へと導く

# しなんげ



あなたの初めは小さくあっても  
あなたの終りは非常に大きくなるであろう。  
(ヨブ記 8:7)

純福音東京教会・出版部

〒160-0021 東京都新宿区歌舞伎町 2-2-19 Tel.03-3232-0067 Fax.03-3232-0729 www.fgtc.jp

Full Gospel Tokyo Church

# CONTENTS

- 2 お入用なので ..... イ・ヨンフン牧師
- 4 ヨンサンコラム ..... チョウ・ヨンギ牧師
  - ・神様に繋がりなさい
- 6 メッセージ ..... 志垣重政牧師
  - ・私たちの内におられるイエス様
- 9 特集 | 20017 年 10 月 31 日は宗教改革 500 周年記念日 .....
  - ・宗教改革の背景とルターの貢献
- 15 信仰の明文化を成し遂げますように⑩ ..... イ・ヨンフン牧師
  - ・信仰の良い人が最高の人だ
- 19 主と歩く ..... ヘンリー・グルーバー牧師
  - ・罪なき者の血が叫んでいる
- 25 我が人生のプラス.....
  - ・主の恵み
  - ・クリスチャンのためにウェル・ダイイングの実践を夢みて
- 33 これが知りたい ..... シン・ソンジョン牧師
  - ・バプテスマのヨハネが食べたいなごと野蜜は  
実際に私たちが知っているいなごと野蜜なのか？
- 34 十字架の檀上 ..... カン・サン牧師
  - ・靈的なカメレオン
- 38 幸福な人たち ..... キム・デイル局長
  - ・24 時間世界に向かって賛美と福音が伝播される
- 43 統一時代を開く ..... ベン・トレイ牧師
  - ・善をもって悪に打ち勝つこと
- 48 世の終わりの日まで ..... ソン・ヒョンギョン牧師
  - ・福音には「神の義」が啓示されている

この「しなんげ」は、おもに韓国版信仰界 10 月号より抜粋して、翻訳し再構成したものです。  
ちなみに、聖書の御言葉は「口語訳」を引用しています。

## 主がお入用なので……

10月最後の聖日は、毎年遵守されている宗教改革記念の聖日です。

今年は500周年を記念する聖日なので、より意味が大きいです。平凡な司祭マルティン・ルターが歴史的な事を成し遂げた背景には、「主がお入用だ」という使命がありました。この使命がなかったら、法王の絶対権力の嵐の前で、一瞬で折れる小さな葉になってしまったでしょう。

ルターのこのような信念は、子どもの頃からよく現れています。少年ルターは音楽的素質に優っていました。聖歌隊に入りたいと思いましたが、年齢制限があり、近くにも寄ることもできませんでした。「主がお入用だ」という信念は、年齢制限を折ることができませんでした。ある日、聖日礼拝が終わった後、ルターは聖歌隊の前にいる指揮者のところまで行きました。

「子どもたちは聖歌隊に入ることはできない、君には、まだ資格がないよ。」

指揮者は厳しい顔で言いました。その時、少年の口からこんな言葉がこぼれてきました。

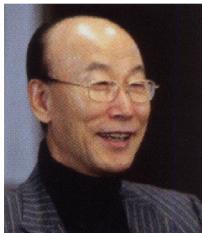
「主がお入用なのです？」と。

指揮者は、この言葉に大きな感銘を受けて、伝統を破り、ルターを聖歌隊員として受け入れ、後にルターは、あの有名な「御神は城なり」という聖歌を作るようにになります。主イエスが十字架事件を控えて、エルサレムに入城の際、弟子たちに言われます。

「向こうの村へ行きなさい。するとすぐ、ろばがつながっていて、子ろばがそばにいるのを見るであろう。それを解いてわたしのところに引いてきなさい。もしだれかが、あなたがたに何か言ったなら、主がお入り用なのです、と言いなさい。そう言えば、すぐ渡してくれるであろう」。(マタイ 21:2-3)。

主が必要とされれば、解かれる御業が起きます。今日も主は、子ろばを解いて用いられます。主がお入用だと言われるのに、誰が何と言えるのでしょうか。†





チョウ・ヨンギ 牧師

単一教会として世界最大規模であるヨイド純福音教会の元老牧師として仕えている。筆者は、美しい社会作りへの参加と、真の福祉社会のために、キリスト教精神を基にして設立された「ヨンサン・チョウ・ヨンギ慈善財団」の理事長として、第二の働きを繰り広げています。

神様の心は私たちの心と比較できないほど大きいです。神様は人ができないことをなさいます。神様は愛であり、私たちは愛されます。神様は恵みであり、私たちは恵みを受けます。神様は健康であり、私たちは健康を受けて享受します。神様は富であり、私たちはそれを受けて享受します。

神様は今も私たちの中で永遠の愛と能力と命の歴史を現しておられます。神様の心は命と健康と平安と秩序と美しさと富です。その心で世をお創りになりました。ですから、神様の形に似て創られた私たちは、神様の心を持っていました。

しかしサタンの誘惑を受けて、神様の前でまつりごとと善悪を問い合わせて、理論を提起した人間は、結局神様の前から追い

出され、その靈は死んでしまいました。今は病的で敗北的な心となり、運命的に盗んで殺して破壊して滅ぼすことしかできなくなりました。

それゆえに、神様はイエス様をこの世に送って「悔い改めなさい」と呼ばせたのです。「悔い改めなさい」この言葉は、ギリシャ語で「メタノイア」、すなわち、考えを変えなさいということです。悪魔から受け継いだ破壊的な考えを変え、神様の考えに変えなさいという御言葉です。天国は手の届くところに来ているから、心を変えて神様の心を所有しなさいという意味です。どのようにすれば、私たちの考えを神様の考えに変えることができますか。

一番目、祈りを通じて可能です。モーセがイスラエルの民をエジプトから連れ出して紅海の前まで来た時、エジプトの軍隊が追いついてきました。その時、モーセが神様の前で祈ると、御声が聞こえました。

「イスラエルの人々に語って彼らを進み行かせなさい。あなたはつえを上げ、手を海の上にさし伸べてそれを分け、イスラエルの人々に海の中のかわいた地を行かせなさい。」(出エジプト記 14:15-16)

モーセは祈りを通して神様の考えに繋がり、その御言葉に従つて行なった時、紅海が分けられる奇跡が起こりました。

二番目の要素は御言葉です。聖書の御言葉を通して私たちは神様の心と考えを受け入れることができます。神様の御言葉は、まさに神様の心であるからです。

ですから祈りと御言葉によって、私たちの心が神様の心に繋がる時、神様の権勢と能力を頂いて健やかな人生を生きることができます。†



## メッセージ

純福音東京教会 志垣重政 牧師



# 私たちの内におられる ——イエス様

——ヨハネによる福音書 14章 19～20節——

もうしばらくしたら、世はもはや私を見なくなるだろう。しかし、あなた方は私を見る。私が生きるので、あなた方も生きるからである。その日には、私は私の父により、あなた方は私により、また、私があなた方におることが、わかるであろう。

信じる者にとって最も大切なのは、生きておられる神様に出会い、私たちがイエス様の内に、またイエス様が私たちの内におられることを体験することです。キリスト教が哲学・倫理・道徳・宗教以上である理由は、イエス様が十字架に架かられ、死んで葬られ、三日目に甦り、今も生きておられるからです。イエス様は、聖霊様として働いておられ、その聖霊様を体験することができるのが、クリスチヤンの特権です。なのに何故、多くのクリスチヤンが、イエス様の働きを体験することができないのでしょうか。その働きを妨げているのは何なのでしょうか。その原因を七つに分けて学んで参りましょう。

第一は、不信仰です。イスラエルの民は430年間の奴隸生活

から救い出され、父と蜜の流れるカナンの地へ向かっていました。しかし、偵察隊は否定的な報告を受けて、神様に対する不信仰を持ったことにより、40年間荒野で彷徨い、結局カナンの地に入ることはできませんでした。「また、神が、わたしの安息に、はいらせることはしない、と誓われたのは、だれに向かってであったか。不従順な者に向かってではなかったか。こうして、彼らがはいることのできなかつたのは、不信仰のゆえであることがわかる。」(ヘブル3:18～19) 五感や理性に頼り、御言葉に頼らないのであれば、生きておられるイエス様を体験することはできません。

第二に、不従順です。サウロ王はアマレクと戦った時に、『人も家畜も全て殺せ』という神様の命令に従わず、自らの名誉のためにアガク王を捕虜に、そして、肥えた家畜を持ち帰りました。この不従順のゆえに、サウロ王に代わってダビデが王として立てられたのです。

第三は、偶像礼拝です。木や石の像を拝むことだけが、偶像礼拝ではなく、神様より大切に想うものがあるとしたら、それが偶像なのです。「だから、地上の肢体、すなわち、不品行、汚れ、情欲、悪欲、また貪欲を殺してしまいなさい。貪欲は偶像礼拝にほかならない。これらのことのために、神の怒りが下るのである。」(コロサイ3:5) 神様以外を放棄した時に、私たちはすべてを得ることができます。「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう。」(マタイ6:33) 放棄した時に、すべてが与えられるのが聖書の真理なのです。



## 宗教改革の背景と ルターの貢献

キム・ヘチョル | 前ルター大学総長

第四は、恐怖です。心に恐れを抱くことは、神様の愛を疑うことです。恐れは、否定的で破壊的、かつ消極的な考えをもたらします。「愛には恐れがない。完全な愛は恐れをとり除く。恐れには懲らしみが伴い、かつ恐れる者には、愛が全うされていないからである。」(ヨハネ4:18) 恐れを追い払うことができるのは、御言葉だけであると悟りましょう。

第五は、人を赦さない心です。私たちは、神様の前で大きな負債を背負った者です。もし、私たちが人を赦さないのならば、神様の心を踏みにじることになるのです。

第六は、悔い改めない頑なな心です。私たちは、悔い改めることにより義とせられ、神様の御前に立つことができます。神の子どもとしての権利行使することができるようになります。

第七に、聖霊様を求める心です。私たちはいつも聖霊様を認め、歓迎し、もてなし、すべてを委ねなければなりません。そうすれば、イエス様は皆さん之内におられ、昨日も今日もいつまでも変わることなく働いてくださいます。聖霊充满でありますよう、主の御名によってお祈りいたします。†

今から500年前、ルターが宗教改革の導火線となつた95ヶ条の論題をヴィッテンベルク市の教会正門前に張り出した。この日、ルターが95ヶ条の論題のため、釘を打ちつけた「金づちの音は、当時のローマカトリック教会には喧しい音になり、改革派のプロテstantト陣営には、その誕生を知らせる祝砲にもなつ」と、ある学者が言ったように、1517年31日、この日は、プロテstantト教会が地上に誕生した日といえる。

### 宗教改革の時代的要請

16世紀、宗教改革が起きた当時、ドイツは非常に宗教的雰囲気にあふれていた。すべての都市、農村とともに、いたるところ

ろに聖堂と修道院が建っていた。主日になれば、すべての信徒は聖堂に行くのが当然のこととされた。そして、子どもを生めば、すぐ聖堂に連れて行って幼児洗礼を受けさせ、洗礼名ともう一つの名前をついた。

しかしこのような宗教的雰囲気とは違い、当時、中世教会の聖職者は道徳的に堕落していた。また、教理的にも間違った救いを教えていた。当時の聖職者すなわち、教皇や神父、修道士の道徳的堕落像は、極限に達した。当時のカトリック教会では聖職者は終身、独身の誓いをしたが、教皇や高位聖職者で、内縁関係の女性や私生児のいないものはないほどで、教会主教職や大主教職も教皇から金銭で買うほど堕落していた。それだけでなく救いの問題も、イエス・キリストの贖いのいさおしを信じて救われたのではなく、教皇が発行した免罪符(Indulgeo)を金銭で買ったり、また、世を去って煉獄の苦しみにある父母の代わりに免罪符を買えば、その瞬間、父母の靈魂も救われて天国に行けるという、誤った救済観を教えていた。

したがって、中世ヨーロッパではあちこちで宗教改革を叫ぶ改革者が立ち上がった。すなわち、フランスのヴァルドをはじめとして英国のウィクリフ、ボヘミアのフスなどが改革を叫んだが、結局は処刑されてしまった。それゆえ、ある歴史学者は言った。偉大な事業が起るためには三つの条件がそろわなければならない。それは、時間、場所そして人物であると。ルターこそ、この三つ条件が重なって宗教改革の旗揚げをしたのである。

しかし、ルターによる改革の影響は、宗教の次元を越えて、政治、経済、社会そして教育等、多様で大きな影響を及ぼした。後にキリスト教歴史学者は近二千年間の歴史を区分して紀元から590年までをキリスト教古代とし、590年から1517年までを

キリスト教中世（暗黒期）、そしてルターが宗教改革を起こしてから現代までを、キリスト教近代として区分する。さらに言うならば、キリスト教近代に門を開いた事件こそ、500余年前のルターによる宗教改革であるといえるであろう。

### 宗教改革が各分野に与えた貢献

第一、ルターは人間中心の救済観をキリスト中心へ改革した。聖書は、誰でも神様が世にお遣わしになられたイエス・キリストを私たちの救い主として信じれば、救いに至ると書いてあるとするのが、聖書的救済観である。これをしばしば単独使役論(Monergism)という。

しかし、中世に入って、すべての高位聖職者が堕落してから聖書的単独使役論とは異なる、いわゆる人間の功業（祈り、断食、苦行、聖地巡礼等）によって救いを受けるという、神人協働論(Synergism)を主張するようになった。人間の功業が後に、いわゆる免罪符一枚で救いに至る、天国行きのフリーチケットのように思うようになった。まさにこの点を箇条書きにして強く批判したのが、ルターの95ヶ条論題の要旨である。

それ以降、宗教改革の後裔である私たちプロテスタントも聖書に記録された御言葉のみ(Sola Scriptura)、イエス・キリストの恵みのみ(Sola Gratia)、信仰のみ(Sola Fide)によって救いに至るという、いわゆる人間中心の救済観からキリスト中心の救済観が回復した。これをしばしば神学界のコペルニクス革命(Copernican Revolution)と呼ぶ。すなわち、15世紀ポーランドが生んだ現代天文学の父とするコペルニクスは、中世教会が教えてきた地球を中心とした天動説に対して、太陽系を中心とした地動説を提唱したのである。

心にして地球が毎日、自転しながら、一年に太陽系を一度回っているという地動説を主張した。改革者ルターもこれまで教皇序で教えていた人間中心の救済観をキリスト中心の救済観に改革した。これを救済論のコペルニクス革命という。そのような点で私たちプロテスタントも聖書的救済論の偉大な相続者という矜持を持つべきである。

## 第二、社会のあるいは公教育を開始した。

しばしば教育学では中世のルターを公教育の父あるいは始祖と呼ぶ。勿論、中世にもすでに主教座学校や修道院学校があった。12世紀に入るとフランスのパリ大学、英国のオックスフォード大学、そしてイタリアにはボローニャ大学などが現れてくるが、こうした大学は主に聖職者や高位貴族が通うところであつて、貧しい農奴や庶民は学校にすら通うことができなかつたため、彼らは無知この上なかつた。これを見て取つたルター改革とともに聖職者しか読むことができなかつたラテン語聖書ではなく、聖書原語から純粋なドイツ語で聖書を翻訳することにした。こうして聖職者、庶民の別なく誰でも読むことができ、恵みを受けうる聖書を翻訳、出版した。これが現在にいたつて聖書公会の母胎となる。同時にルターは初・中等教育を奨励し、大学にあつて知識に飢え渴く人々が広い階層から勉強できる条件を提供して近代大衆教育 (Popural Education) による近代化を促進したとされている。

## 第三、ルターによる職業観の改革は、近代産業社会に大きな影響を及ぼした。

古今東西を問わず職業には貴職と賤職があり、その職業によつ

て身分が異なつた。そして、しばしば西洋では職業を「job」というが、その意味は「食事ができる」に由来する。さらに言うと、職業は単なる生活手段ないしは立身出世のための手段とするのが、この言葉の意味である。

中世ヨーロッパでは職業を聖職と世俗職で区別し、聖職に属したものは、死後に天国でも一番高い座に位置すると間違つた教えを教えた。それゆえ、中世の母親は息子を生んだら神父になることを望み、娘を生んだら修道女になることを願つた。しかし、ルターは宗教改革によって世俗的職業に対する聖書的解釈をしたので、すべての職業は、何でもその職業は job ではなく、神様の召命 (Calling または beruf) と解釈した。すなわち、バチカンの教皇職と家庭の主婦とでは、その役割が違うだけで、神様は人生の現場で召命した人々と、それぞれともに働くという意識を持つことを主張した。これがいわゆるルターの「万人祭司職 (Universal Priesthood)」(第1ペテロ 2:9) であり、この精神が各界各層に広がるとともに産業現場では自然に不良品が減つて生産高が増え、近代産業化に大きく貢献したとされる。それゆえ「プロテスタンティズムの倫理と資本主義精神」を書いたマックス・ウェーバーは、彼の著書において「自分の職業を召命ないしは使命として認識しない国は決して繁栄しない。」という名言を残した。

## 第四、結婚と家庭の回復を与えた。

最近、衝撃を与えた事件として、奉仕活動をする小学生に学長が性行為、または男性間の性行為の動画を見せるという事件があつた。これは最近の同性愛と関つた問題として大きな社会的衝撃を与えている。

しかし中世カトリック教会は神父や修道女に独身を要求し、独身が神様の恵みと主張した。それゆえ、ルター自身も独身で修道して神父となった。しかし、新旧約聖書を翻訳して深く研究するなかで結婚するほうが、神様の栄光をあらわすことであり、神様が世の初めに制定した家庭制度を回復することが、すなわち神様の栄光をあらわすことであると悟るようになった。創世記2:18を見ると、「人間が一人でいることは良くないので、わたしがそのために助け手を与えるよ。」という御言葉から、世の初めに神様が結婚制度を立てられたのが明確であるが、カトリック教会はこの命令を拒絶するのか。

ルターの「卓上談話」にある「私が結婚したので、教皇は怒るだろうが、神様は非常に喜ばれた。」という彼の名言は、聖書的結婚観を回復したものである。以後、プロテスタントの聖職者は自由に結婚できる道が開け、また、結婚とともに子供の出産により「生めよ。増えよ。地に満てよ。」（創 1:28）という神様の御心をこの地に行うことが出来るようになったので、ただ感謝なことである。それゆえ、200年前、スコットランドの有名な知識人トマス・カライルは、「最も偉大な偉人よ。知識人よ。勇気ある改革者のルターよ。この世代と後に続く多くの世代は、彼のゆえに、神に感謝するであろう。」と言った。この言葉を記憶して数年前、カトリック教会の神学者の言葉を思い起こす。「中世に聖職者が腐敗して教会が堕落した。神様はルターのような偉大な改革者を遣わされた。今日の韓国プロテスタントはどうして中世カトリック教会の前轍を踏んでいているのか理解できない。」この苦言を鏡として韓国プロテスタント教会は立ち上がり、光を放ち、そして積極的に改革に参加しなければならないであろう。†

信仰の明文化を成し遂げますように⑩ | イ・ヨンフン牧師 ヨイド純福音教会



## 信仰の良い人が最高の人だ



### 北朝鮮宣教は永遠の祈り題目だ

私は以前にフォーチュン誌のインタビューで北朝鮮問題と南北に対して見解を明らかにした。私たちはある日突然統一となり、南北朝鮮が劇的な混乱に陥るような統一を望んではいない。東西ドイツが20余年もの間、自由に往来しながら意識の葛藤を解いていったように、私たちも南北離散家族の再会を1年継続して意識の間隙を狭めなければならない。開城、金剛山、平壌、羅津先鋒などを開き、交流の門を開かなければならない。既に一部の北朝鮮の人々は、USB（データ内蔵媒体）などを手に入れ、韓国の人気ドラマを視聴している。これが後に南北交流の良い影響に近づけるのだ。

私は、北朝鮮に3回行ったことがある。広陵なマンドゥン山、

鋭気、生氣を失った道…。それは、私たちが住む場所と完全に違う世界だ。通行すら自由にできない。地域境界線を越える度に通行証と出入証のチェックなどで足止めされる。北朝鮮の住民らは経済的、文化的、全ての面において私たちとは比べられない悲惨な生活を送っている。私はフォーチューン誌のインタビューで「対話と漸進的交流を通じた平和的統一」を強調した。なぜ北朝鮮にそのような深い関心を持つのか。北朝鮮は私の祖父が信仰を受け、子孫たちを信仰で訓練した祝福の地だからだ。この地で聖霊運動が初めて起きた福音の地だ。それゆえ北朝鮮の宣教を他人事のように思うことができない。北朝鮮宣教は、私の切なる祈り題目だ。

#### 「イエスを信じない人は家族になることはできない」

祖父が人を判断する最重要基準は信仰だった。イエスを固く信じる人を最高の人として考えた。そのため、婿や嫁となる人は無条件に信仰が良くなければならなかつた。9人の兄弟を皆、そのような思いで育てた。

子どもたちの結婚条件はとても単純だった。どんな特別なことも望まなかつた。「家族になるには、必ず合わせなければならぬもの、それは信仰だ。イエスを信じない人は絶対に私の婿や嫁になることはない。学閥や財産は重要ではない。信仰が一番大事だ。」

イエスを信じない人は、理由を論じる余地もなく結婚対象から除外した。その当時には教会に男性信者が多くなかつた。教会内に良い独身女性は多かつたが、良い独身男性は少なかつた。そのため、叔母たちは結婚相手を教会で探せず自然と外で探すしか無かつた。

延世大学校の数学科を卒業した2番目のおばは近くしていた人がいた。延世大数学科の同じクラスメートだったが、ノンクリスチャンだった。おばの心は本気だったが、祖父の心を変えることはできなかつた。それから結婚の対象者から除外された。その方はおばと結婚できなかつたが、教育部視学官となりおばが大変な時、助けを求めるとき々と助けてくれた。数学の教師として在職していたおばが地方に引っ越し、学校を変える時困難が無いように手助けをしてくれた。

#### 完全なるクリスチャンになるまで

ある日、結婚相手を探せず苦労していた時、ある紳士が教会にジープの車に乗り現れた。60年代にジープの車とは、権力と名誉ある象徴だった。おばの夫がいつも景武台（現：青瓦台）の話をするので家族は彼が景武台で働く人だと思った。おばの夫の友達の中で詐欺まがいのことをする人がいたが、まさにその人がでっちあげたことだった。当時、景福宮慶会楼で盛大な結婚式をして、話題にもなつた。しかし、いざ結婚をしてみると夫は景武台に勤務しているわけでもなく、ジープの車の持ち主でも無かつた。慶会楼での結婚式の費用もすべて借金したもので、それを返済するのに苦労しなければならなかつた。その日からおばの涙の祈りが始まった。

そして夫が長く家を出ている間、おば一人で子どもたちを育てるのに大変苦労した。しかし、おばの涙の祈りの実が結ばれ、長い放蕩の末、夫が戻り、共にアメリカへ渡り熱心に信仰生活をして、教会の長老となり教会に忠誠し、奉仕しながら神様の召しを受けた。

末っ子のおばも、延世大学に通つたがクラスメートと付

き合いながら同じ悩みに陥った。そして、2番目のおばに相談した。

「お姉さん、私が付き合っている人は信仰が無いのです。お父さんが知ったら絶対に結婚を反対するでしょう。お姉さんに一度だまされた後には徹底的に調べることになったのです。この人と必ず結婚したいのに…。」

それでおばの夫と作戦を立てた。末っ子のおばの夫は結婚する前、主日には教会に出て礼拝を捧げ、祖父に挨拶をした。

「お父さん、今日も恵みをたくさん受けました。」

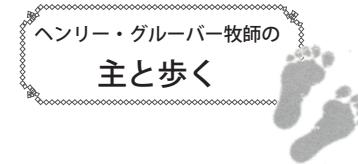
祖父はこれに騙され、結婚を許した。

おば夫婦は結婚後、すぐにカナダ・オタワへ移民し幸福な生活を送った。そこでは韓人会の会長として過ごし、信仰も持つようになり、教会の長老として教会と在民社会のために大きな活動をした。しかし、結婚初期にこのようなことがあった。ある時、おば夫婦が祖父に送った手紙に家族写真を同封した。しかし、その写真の中のおばの夫がたばこを持っていたのだ。祖父が相當に怒った。

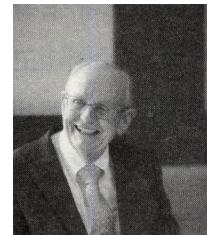
「ヨンの夫（末っ子のおばの夫）が信仰生活をでたらめにしているのだな。私を騙したのだな。イエスを信じているのは、はつたりだ。」

おばの夫婦はその事を釈明するのに脂汗を流した。もちろん後にはすべて尊い神様の民となり、福音の働きに献身した。

このような葛藤と逆境にふれ「完全なるクリスチャン」として今に至った。祖父の5名の娘皆が素晴らしいクリスチャンとなつた。4名は勧士、1人は牧師夫人となつた。祖父の教えと祈りが決して無駄なものではないことを見てくれた出来事だ。私はこのような一貫した祖父を尊敬する。†



## 罪なき者の血が 叫んでいる



ヘンリー・グルーバー  
(Henry Gruver) 牧師

「世を歩くとりなし祈祷者」で知られた筆者は18歳の時からアメリカのアリゾナ州フェニックスの犯罪多発地域で主と共に歩き始め、今も主と共に歩いている。彼は全世界のどんな場所でも、出会った人たちのために祈り、福音を伝えている。彼の人生には超自然的な不思議が多くあったが、より大事なことは、彼が主の御言葉に従順しながら歩き、祈っているという事実だ。

「彼らが野にいたとき、カインは弟アベルに立ちかかって、これを殺した。主はカインに言われた、『弟アベルは、どこにいますか』。カインは答えた、『知りません。わたしが弟の番人でしょうか』。主は言われた、『あなたは何をしたのです。あなたの弟の血の声が土の中からわたしに叫んでいます』。」  
(創世記 4：8b～10)

聖書は、殉教者たちと罪もなく殺された者の血が土の中から主に訴えているという。私は、この御言葉が霊的な実体であるという事実を経験によって知っている。

大英帝国のワイ・リバー沿いを歩いていた時、このような体験をした。絶壁の近くに行ったら、10代の女の子の泣き声が聞こえてきた。私にも6人の娘があるので、13、14歳くらいの女の子の声を聞き分けることができた。

雑草が茂っているこの地域を、靈によって祈りながら歩いた。少女たちが虐待されて泣き叫ぶ声に、私の中の義憤がこみあがってきた。

「誰であろうとも、あの子をいじめようとするなら、先にわたしを相手にしなければならない」と思った。

絶望の中で叫ぶ声だった、無残に虐待され叩かれる幼い女の子の声だった。

「主よ、こいつらの頭を打ち飛ばす力を私にください。30名でも40名でも構いません」と私は祈った。

「幼い子たちにあんな仕打ちをする者たちを放つておくわけにはいきません。」

事件現場を押さえて少女たちを助け出そうと、茂みの中をかき分けて進んでいくと、聖靈様が私に言われた。

「人間的に反応してはならない。」

私は主にお聞きした。

「主よ、どういうことですか？ あんなことをするよう、放つておくことはできません。」

絶壁の下に何があるかは見えなかった。その時、泣き声がまた聞こえた。絶壁の下まで行ってみると、そこは悪魔の祭壇があった場所のようで、地面が固くなっていた。その場所には何もはえていなかった。石が円形におかれしていて、数え切れないほど、火を燃やした後にできた炭が転がっていた。

私ができることは、四つん這いにその血を這いながら素手で地面を掘ることだった。私は泣いている子を見つけるために、手で地面を掘り起こすつもりだった。泣き声が地面の底から上がってきたので、私はその子たちがすぐ下に閉じ込められていると思った。

その時、主が私にある場面を見せてくださった。ローマの兵士たちがその地域に陣を張り、町中を歩き回り、幼い少女たちをとらえていた。何人かはその場で殺され、残りの子どもたちは彼らが連れて行った。そして私が立っていた場所で、その子たちを虐待し殺害した後、川に投げ込んだ。私は、命を失った女の子たちの体が川の水面に浮いて流されるのを見た。

主は言われた。

「これは3世紀に起こったことだ。しかし、彼女たちの罪なき者の血が、今でも川の底から訴えている。」

私は後に、その地域の歴史に詳しい歴史学者から、3世紀に実際に起こった事実を確認することができた。ローマが侵略ってきて、無残にも殺人を繰り返していた。主は私に、ローマの兵士らの代わりに悔い改め、彼らの罪が赦されたことを宣言するように命じられた。

罪のない者たちが殺されてその血がまかれた地には、惡しき靈どもが合法的な権利を持って占領しているため、その罪を悔い改め、イエスの血潮で覆い、聖めなければならない。

中絶が行われる産婦人科や家族計画協会のために祈る時、私は最も深い悲痛と悲しみを感じる。死んだ子どもたちの血が、地面の底から主に訴えているという事実を、知っているからで

ある。

信じる宗教と関係なく、人々は中世時代に行われた魔女狩りは恐ろしいほど残酷なことだと思っている。魔女と決めつけられた人々を火に燃やし殺したことは、残忍な仕打ちだと認めない人など、現在は一人もいないはずだ。

しかし、それよりももっと恐ろしくて残酷なことが多くの国々において公然と行われている。それは、胎内の子どもを殺すことだ。罪もなく死んでいった水子たちの血が、土の中から神の義なる裁きを求めて訴えている、という事実を人々は知らない。

1900年初期まで、ほぼすべての人は、女性が自分の胎内の子をおろすことを殺人だと同意していた。1900年初期からマーガレット・サンガーという看護師が、女性に胎内の子をおろす権利を与えるための運動を始めた。進歩左派メディアは、マーガレット・サンガーが当時の富裕層から資金を調達するために、「貧困層の無節制な出産によって生まれた多くの子どもたちが資源を消費することを防ぐために、貧困層に産児制限をさせる」と、約束をした事実を隠そうとした。

マーガレット・サンガーは、ロックフェラー財団のようなところから支援を受けて、アメリカの貧しい人々が住む地域に家族計画協会という機関を設けた。マーガレット・サンガーは優生学を適用させ、多くの黒人少女たちに強制的に不妊施術をさせ、一生涯子を産むことができないようにした。マーガレット・サンガーは、貧しい人たちが子どもの人数を調節して制限し、より良い人生を生きることを目的にした家族計画運動を起こしたのではない。マーガレット・サンガーは、女性たちに避妊と中絶に対する知識を伝えるために書いた多数の小冊に、「神がい

ないなら支配者もいない」という文句を記している。マーガレット・サンガーは、自分の主張がキリスト教の教えに違背することを知っていた。中絶が合法化されてから性的堕落が加速化し、結局は同性結婚が合法化されるまでになった。

アメリカ44代大統領バラク・オバマは、アフリカの国々に対して、国際基金の援助を受けたいなら同性愛を合法化することを要求した。アメリカをはじめ全世界のクリスチヤンにとってはとても心配になる行動であり、受け入れ難い要求であった。クリスチヤンであるウガンダーの大統領は、援助を受けられなくなったとしても同性愛を合法化させることはしないと言った。

マーガレット・サンガーが始めた中絶と避妊運動は、1970年代に家族計画という名で、アメリカの一部の人々によって全世界に広まった。貧しい国々は国際救護基金の援助を受けるために、産児制限政策を選ばざるを得なかった。途上国に産児制限政策を強要したアメリカやヨーロッパの人々も、マーガレット・サンガーのように、人口が急速に増加すれば地球の資源が速やかに枯渇してしまうと心配し、このような政策を立てたということを知る人は少ない。

ヨーロッパを旅行する人は、ヨーロッパの所々に建てられたイスラムの礼拝堂と、町中で見かける中東の人たち、そして今はほぼ定期的に発生する、ムスリムによるテロの爪痕に直面するようになる。イタリア、フランス、スペインなど、ヨーロッパの国々が20年後にはムスリム国家に変わるだろうと予測している。

あるヨーロッパの牧会者は何年か前に、「我らが今まで5千万

人の胎児を中絶させたが、神はその数と同じ数のムスリムをこの地に送られた」と述べた。ヨーロッパの国は国家を維持していくために、自らが殺した胎児の数と同じ数のムスリムを連れて来てでも、穴埋めをするしかなかった。だから、ムスリムの移民を許可したのである。多産をするムスリムと、一人の子どもをやっと産むヨーロッパ人と共に暮らすなら、結局ムスリム人口が急速に増え、ヨーロッパはムスリムの国家になってしまうだろう。

創世記によれば、主はアダムとエバを造られ、祝福し、産めよ、増えよ、地を満たせと言われた後、全地を治めるように命じられた。増えないと治めることはできない。多くのクリスチャンやその指導者は、中絶がどれほど恐ろしい罪であるかを正しく認識していない。そして、家族計画という名で行われた産児制限が悪魔の誘惑であったという事実を、いまだに悟っていない。若いクリスチャン夫婦は、何人の子どもがほしいのか、主に祈りつつ決めるべきだ、と私は信じている。

私たちが暮らす地で起こる危機の数々は、「速やかに悔い改めて立ち帰りなさい」という主の警告である。純潔ないのちを殺すことを許可し同調していながら、全く罪意識を感じず、悔い改めないでいるのではないか、すべての教会は振り返ってみる必要がある。生命に対する主の御言葉に従わず、世の哲学や悪魔の教えについて行った罪を悔い改めないなら、国家を危機から救ってくださいと祈る私たちの祈りに、主は答えてくださるだろうか？ 御言葉に堅く立って、省察してみなければならぬ！ †

## 我が人生のプラス | 我が人生の最高の贈り物



キム・スジョン  
京畿（キョンギ）大学、  
メディア映像学校教授

## 主の恵み

小学校1年生頃から日曜学校や夏のバイブルキャンプに欠かさず参加し、キリスト教の文化に慣れていた幼少時代を送った。神の存在を疑っていなかった自分がクリスチャンであることを疑わなかった。しかし、20代のある日、救いの確信を問う青年部の牧師先生からのアンケートで、自分自身にある質問をするようになった。「果たして私に救いの確信があるのか」。そしてこの質問と正直に向き合うようになった。

当時、私は神様が生きておられることと、イエス・キリストの死で値なしの救いについては知識的な同意はしていた。しかし、キリストとの人格的な出会いがなかったため救いの確信は「不明確なもの」として理解していた。そのため、救われたクリスチャンが享受する真の自由と感謝がない柄だけキリストの人生を生きていたのだ。結局、人生の目的と意味を見つけられないまま、無意味な信仰生活に懷疑を抱き始めた。

### 夢を通して働く神様

そんなある日、すべて神様の恵みで神様が私の人生に電撃的に介入し始められた。心の頑なな私を回復するための特別な方法を用いられた。まさに夢を通して働く神様、ニューヨークに留学

中だった当時、イエスの再臨を夢を通して見ることになった。

当時、夢があまりにも実在的であり、救いの確信がなかった私にそれはあまりにも恐ろしい経験だった。夢の中で感じたことは言葉では説明できない恐れそのものだが、まるでその場で死に、私の存在が最初からまったく消えてしまえばいいという気がするほど恐ろしかった。

夢で、イエス様の御前に立った時、主は、裁きと刑罰のいかなる恐れについてなにひとつ言われなかつたが、神様の権威自身そのものから来る聖なる恐れに圧倒され物理的な死を前にしたものと比較できない恐れだった。当時は、この恐れをどう表現するか分からなかつたが、後日、イザヤ書で、イザヤが告白した「わざわいなるかな、わたしは滅びるばかりだ。」(イザヤ 6:5) という表現を見て非常に適切な表現だと思った。その夢で私は、御前にひざまずき涙で訴えた。

「一度だけ、主を真心もって信じる時間と機会を与えてください。イエス様を救い主として信じていなかつたのです…。」

その場で主を信じないでいたことを徹底的に悔い改めた。夢からさめた後の私の顔は、涙と鼻水でぐちゃぐちゃになっていた。数日後、一緒に留学していた友人であるジュリと通話することになり、私が見た夢を分かち合うと、ジュリがしばらく沈黙した後、「スジョン、、私… とても怖い…私も同じ夢を見たよ。」と言った。

以来、私の信仰と生活は急激に変化し、何よりも救いの感激とクリスチャンが享受し自由による真の人生の満足感を味わうことになった。同時に、御言葉と祈りを慕い早天礼拝、金曜礼拝、水曜礼拝、主日礼拝が私の喜びとなり、主と交わ



『エン・ハクコレ』  
十代たちと共にした  
伝道旅行

ることが楽しかった。

御言葉と祈りと礼拝を慕い求めると、知人の集まりは、自然と祈り会になり、その集まりでの私の役割は、ほとんどの導き者になっていた。そうした2009年当時、専門領域において現場の専門家の方々に特化した神学校として知られている松明トリニティ神学大学院大学に入学することになった。しかし、フルタイムで仕事をしながら勉強するには、負担になる分量の学習量に、ほどなくして休学をするようになって安息月日を送った後復学をして、土曜日の開設講座を中心に講義を聞きながら、8年6ヶ月かかり2017年7月に卒業をすることになった。

7月の休みを利用して、牧師試験を準備して受験し、10月23日には実にありがたく牧師按手を受けるようになった。牧師になりたいと始めた勉強ではなく、キャンパスを御言葉で、よりよく伝えようとする心で始めた勉強を通して、神様が使役者としての職まで許された。これは、言葉では言えない恵みである。過去15年間を平凡なクリスチャンとして地域の教会とキャンパスに伝え祈り会とのカウンセリングを通じて、神様の恵みを交わした。今許される時間を通じて、イエスによる何に



ウリ葬儀社協同組合は、旧式の葬儀儀式をクリスチャンの健全な葬式文化に変えるという使命をもつ、健全な協同組合だ。

め、私はウェル・ダイイング教育について知るようになった。ウェル・ダイイング教育とは、一言で言えば、人は死（最期）に対する準備ができていれば、より充実な生き方ができる。何の準備もなく突然、死（最期）を迎えるのではなく、予め準備した後、死を迎えなさいということだ。これは、聖書の御言葉と同じ脈絡であるとわかった。聖書に示された御言葉を要約すれば、「私が死んでこそ、キリストが私の内に生きることができる」だ。そして主は、私たちに代わって死なれただけでなく、私たちと共に生きながらえたいと願っておられる。

「もしわたしたちが、彼に結びついてその死の様にひとしくなるなら、さらに、彼の復活の様にもひとしくなるであろう。」(ローマ6:5)

これのためにウリ葬儀社は、ウェル・ダイイング実践教育院とともにウェル・ダイイング実践教育を教会に紹介している。イエス様の死と連合してこそ、真のウェル・ダイイング（良い死、良い最期）であり、イエス様と共に私は死んだと知ることが真の葬儀文化の出発のゆえだ。そうしてこそ、私たちがイエス様と共に再び生きることができる。知ることで終わってはいけない。具体的な実践方案がなければならない。<しなんげ>を通じて、ウェル・ダイイング実践運動が広がることを私は望んでいる。†

## 我が人生のプラス | 我が人生の最高の贈り物



イム・ケエフン  
ウリ葬儀社協同組合理事

## クリスチヤンのために ウェル・ダイイング の実践を夢みて

私は1997年4月にデウ証券のハンガリーデウ銀行に勤務していた。当時、教会と大宇証券親交会、証券団宣教会、職場聖書勉強会(BBB)などで忙しく活動しながら、宣教のビジョンを持っていた。そして、現地人宣教に励んでいる純福音教会のハ・ヨンタル宣教師に出会い、私は普通の聖徒として宣教活動にたずさわるようになった。幼いころから長老教会に通っていた私は、純福音教会での信仰生活は馴染めないところはあったが、ハ・ヨンタル宣教師の情熱的な賛美と現地人の主に対する働きぶりに感動し、毎週水曜日には仕事を終え、『靈的な四つの法則』のトラクトを手に持って路傍伝道に励んでいた。

毎日早天祈祷会にも出席し、純福音教会特有の声を上げて祈る祈りを捧げた。そのために声が枯れて、声はハスキーになっていた。ちょうどその頃だった。突然、自分の信仰がイエス・キリストとかけ離れた信仰であったことを知った。その時はそれがどういう意味か全くわからなかった。ところが、聖書を読む度にある御言葉が心に突き刺さってきた。『私につながっていなさい』——「あなたがたが私につながっており、わたしの言葉があなたがたにとどまっているならば、なんでも望むものを求めるがよい」(ヨハネ15:7)という御言葉だった。

私は、「わたしにつながっていなさい」という意味がよくわからなかつた。ところが、ある日突然、イエス様は私に「わたしが何を与えるか?」と質問なさつた。「はい?」——私は動搖した。さらに主は、「わたしを差し出すだけでは不満足なのか?」と訊かれた。

今の私には大変なことだが、当時の私は「主が私の内におられるのに、何をまた与えてくださるとおっしゃるのか」と思いつつ、ただ坦々としていた。

その後、帰国してソウルに行き、「とりなし祈り宣教団」にて訓練を積み重ね、幹事として活動していた。しばらくして、主は私に言わされた。「あなたの内にわたしがいる。しかし、わたしの顔とわたしの心がない」——私は驚いた。「主よ、私は、職場と宣教団を平行しながら、大宇証券親友会の会長としても努めているのに、主の顔と主の心がないとおっしゃるのですか?」私は主に叫んだ。「主よ、私に命を与えてください!私を主の命を伝える通路として用いでください」と……。

そうして1ヶ月後、生命の光(センミヨンビツ)教会で真の福音に接し、自分の信仰が律法的な信仰であったことを悟つた。それから、私の信仰は律法的な信仰から真の福音(良き知らせ)へと変わり、信仰する目的が変わり、キリストの心を抱き、主をもっと知りたいと、励むようになった。そして、これが主の業、主のための働きであることを知つた。「イエスは彼らに答えて言わされた、『神がつかわされた者を信じることが、神のわざである。』(ヨハネ6:29)

そんな中、主は約束通りに主を持つように導き始められた。それは、私の内の律法を殺す、苦しい荒野の始まりだった。つまり、キリストの十字架上での死に自分を結び付けることだつ

た。聖書には、私たちはイエス・キリストと共に十字架につけられて死んだ、と示されている。律法と罪に対して死んだと言われている。しかしながら、この御言葉通りに生きている人はそれほど多くないようだ。殆どの人は律法に対し、罪に対して生きている。「しかし私は、神と生きるために、律法によって律法に死にました。」(ガラテヤ2:19)

### 聖書的な死(最期)

主は、この御言葉を私の内で実現させようと、作業を始められた。会社を辞め、自信を持って始めた事業は、2年足らずで倒産してしまつた。それからも、手をかけた仕事はすべて上手くいかず、申命記8章に書かれた御言葉のように、主は私を低くされ、渴くようにされた。これらを通して、主が私にご自身を差し出してくださいことがわかつたから、希望を持って進むことができた。その過程において、妻にはたくさんの苦労をかけた。しかし、主は私の妻も愛しておられるがゆえに、共に新しくつくり変えてくださると信じている。

そうして、昨年の6月、私は「ウリ葬儀社協同組合」に加入了。ウリ葬儀社協同組合は、旧式の葬儀儀式をクリスチヤンの健全な葬式文化に変えるという使命をもつ、健全な協同組合だ。新し環境と新しい職場で健全な葬儀のために、和紙で作られた喪着に紙の棺に囲まれた事務所で、私は神の御旨を悟つた。「主は、ここでも自我を殺し低くなることを望んでおられる」と。どれほど素晴らしい主だろうか。主の愛に感謝する。また、それを提供したウリ葬儀社に感謝する。

ウリ葬儀社協同組合では、ウェル・ダイイング(Will-Dying: 良い死、良い最期)という教育プログラムの後援をしているた



『エン・ハクコレ』十代と一緒に。

これらとの交流を通じて、私たちの次世代が、神様の御前で美しく成長する姿を見ることが出来、本当に感謝している。

もかえがたいの恵み、また来られるイエス・キリストと統一韓国のために祈り、共に分かち合える、神様に喜ばれる専門の働き人として成長することを望んでる。

特に神様が若者たちとの出会いで、お互いに信仰を挑戦する機会を与られ、時には、次の世代のために、時には国のために一緒に祈っている。約5年間一緒に礼拝と祈りを共にした青年たちは、すでに美しく成長したし、最近数年間は、忠清南道-牙山の「ナジル共同体」の十代と忠清北道-槐山の「エン・ハクコレ（呼ばわった者の泉）」十代との交流を通じて、私たちの次の世代がどのように神様にあって美しく成長していくのかを見る楽しさを享受している。私の人生に関与して、神様を分かるようにして、御国を慕い夢見みさせる神様の恵みにとても感謝している。資格のない者を呼んで、神様の御業に用いられる恵みを説明できないが、私の良き神様が呼ばれ者を通じて、今後行なわれる善いことを期待している。†

これが知りたい | シン・ソンジョン 牧師、<クリスチャン文学の木> 編集者

## バプテスマのヨハネが食べた いなごと野蜜は実際に私たちが 知っているいなごと野蜜なのか？



いなごと野蜜は、実際にあるものとして見るのではなく、靈的に解釈する場合もある。しかし、大半は文字通りに信じている。靈的に見る人たちの中には、実際にバプテスマのヨハネがいなごと野蜜を食べたのではなく、神につき従う者たちが備え持つべき姿、素朴さと清貧さを現したものだと言う人もいる。私は保守主義神学者として、マタイによる福音書3章4節とマルコによる福音書1章6節の御言葉を額面通りに信じている。しかし、いなごと野蜜は私たちが想像しているものとは異なる。

この問題を理解するためには、当時、ヨハネの時代の自然環境や背景を少し知っておく必要がある。私はヘブライ大学に招かれ、6ヶ月間ラビたちと一緒に研究生活を送ったことがあるので、少しは知っている。韓国には60種類のいなごがいるが、青い色をしたいなごは、おもに田んぼの中で育つ。今や、害虫のゆえに多くの農薬が使われているため、あまり見かけなくなつた。野原で育ついなごは、様々な色をしているが、私の子どもの頃は、このいなごを採って紐で吊り、家に持ち帰って焼いて食べた。それが子どもたちにとって、とても香ばしくて美味しいおやつだった。

問題は、荒野には花がほとんどないため、蜂もない。そういう点においては、いなごを木の実——皂莢（さいかち）の実——と見なすことはできる。しかし問題は、イスラエルの荒野は、皂莢（さいかち）の木が育つ環境ではないという点だ。それゆ

え筆者は、文字通りに青いいなごではないが、イスラエルの荒野でよく見かける、同じような種類のいなごの可能性が高いと見なしている。

それでは、野蜜は何だったんだろうか？韓国の言葉ではトチョンクル——韓国産蜂蜜——だ。しかし、バプテスマのヨハネが活動していた時代に、イスラエルの荒野では花がなく蜂もいないため、私たちが考えるような蜂蜜ではなかったはずだ。イスラエルには三種類の蜜がある。一つは蜂蜜であり、もう一つは棕櫚の木の蜜（シロップ）だ。そして次は、自莢（さいかち）の木の蜜だ。個人的には、荒野の何処にでもある棕櫚の木につく、ナツメのようなヤシの実から絞り出したシロップであったと見なしている。そのように見る最も重要な理由は、当時、ヤシの木の実は貧しい人たちの大切な食物であったからだ。だから全部採ってもならず、地に落ちたものも貧しい人たちのために残して置くようにした。†

---

十字架の檀上／カン・サン牧師十字架教会、<私は本物なのか？>著者

---



## 靈的なカメレオン

大学4年生の時、初めて出会った彼の姿は衝撃そのものでした。熱い6月の太陽がアスファルトをかまどのように焼いている時に彼は、そのアスファルトの上で一粒の麦のこどく跪いて祈っていました。世俗化されていく学校と民族の救いのためにその夏の暑さよりも熱く祈っていました。教団の罪を己の罪のように涙で悔い改めていました。祈っている姿を見るだけで私

の目には悔い改めの涙が流れました。

朝、早くから誰よりも学校に早く来て祈り、賛美し、そして登校する学生たちに福音を伝えました。ただ伝道チラシを配る形だけのものではありませんでした。一人ひとりを最後に出会う人のように接し、大切に切なる思いで福音を伝えました。授業が終わると、私たちは一緒に学校裏の山に登って夜遅くまで祈りました。済州島出身、そして海兵隊出身のその友人は、私が今まで会った誰よりも情熱的にイエス・キリストを学び、伝道しながら歩んでいく神の人でした。

ところが、その日、その友人に対するすべてが崩れてしまいました。その日は予備軍訓練がある日でした。大学生は学校に通う関係で、一日だけ受ければよい日でもありました。私も特攻隊出身であり、軍服には自慢のマークが多く貼り付けてありますが、やはり海兵隊の軍服は華麗なるものでした。問題は、その軍服ではなく、その軍服を着るや否や変わってしまう彼の態度でした。

ボタンを外し、帽子は変に被りました。靴はかかとを潰して履き、銃はずっと引きずり持って歩きました。教官たちの話をほとんど聞かず、訓練の時間は反抗と不従順で一貫しました。皆が集中して訓練を受ける時間がありませんでしたが、その時間さえも木の下で、帽子を顔に被り寝てしまっていました。後は教官も手に負えない程でした。私はその瞬間考えました。「神の人がなぜ着た服と状況によって変わってしまうのだろうか？」と。

心は痛いのですが、牧会の現場で20年以上働きながら、私はこのような靈的カメレオンたちを数多く見ます。彼らは教会で見せる姿と世の中で暮らす姿が全く違います。教会で見せる温和で親切な態度は、教会のドアを出ると駐車場から変わります。世の中の人たちと全く違いがなく、いや、もしかしたらもっと

酷い姿で、自己中心的で欲望的、なおかつ計算的でした。彼らの一部は言い訳をします。どうしようもない状況だったと。しかしそれは、自分がどうしようもない存在だからではないでしょうか？存在が主体になるのであって、状況が主体になるならば、私たちは神様を信じているのでしょうか。それとも環境を信じているのでしょうか。

今も私の目前にある祈りのノートには、多くの人の祈りの題目が書いてあります。しかし、彼らの祈りの題目は大半が環境の変化です。夫を変え、職場を変え、家を変え、服を変え、教会を変えてくださいと言います。しかし、いかに環境が変わっても、己が変わらなければ何の意味もあいません。こんな話は申し訳ないです、豚はどんなに綺麗に洗って上げても、その豚は結局、汚い豚小屋に戻って寝転がるに違いありません。

主イエスは私たちをこの世の塩と光として遣わされました。塩と光とは何ですか。ただ良いものだという意味でしょうか。塩と光の一番大きな特徴は、絶対に環境の影響を受けないことです。むしろ塩と光は環境に影響を与える存在です。さらには塩と光は必要とさえないところには送られません。光があるところにさらなる光は必要とされず、塩気のきいたものには塩は必要ありません。塩がつかわされる理由はそこに生命となる塩気がないからであり、光が差し込む理由はそこに死の暗闇があるからです。

この事実は、私たちが不信仰の家族の構成員として、また、苦しくて大変な学校や会社の一員として、人生を歩んでいくとても大事な理由を説明してくれます。私たちは何もかも気楽で良いところへ行くために、この世に来たのではありません。辛く厳しい場所で神の福音を伝え、彼らに小さなキリストとして

生き抜くためです。私たちが神の通路になって、大使になって、神様の望まれることを成し遂げるためにこの世に送られて來たのです。私たちはそのような存在なのです。

教会を開拓して10年以上、一人の聖徒のために祈りました。私はその聖徒のために祈りを捧げると、いつも涙がこぼれます。あまりにも厳しい状況と環境のなかで、ただ主だけを見上げて走って行くその聖徒を思うと、心が張り裂けそうになりました。私は何度も神様に問い合わせました。「主よ、こんなにも純粋で切実に主を慕うあの聖徒になぜ物質と関係、暮らしの回復を与えてくださらないのですか？」と。ところが、私は最近になってわかりました。その聖徒は状況が変わった途端、すべてにおいて変質してしまっていることを。物質ができ、時間ができると貪欲と虚飾、高慢に変色してしまいました。自身は華麗な色に変化されたと思いがちですが、私から見れば、その聖徒は悪臭を放ち、恥かしいものに変質していました。新たに涙をもって祈りました。「主よ、なぜその聖徒に貧しさと苦難、試練を残しているかを今は分かりました。何も知らず主に問い合わせて祈った私を許してください。」と。

そして、今は誰かよりも私自身のために祈ります。「神様、私の環境ばかりを変化させず、私の内面や品格、能力を常に新しくしてください。環境が変わっても変質しない純金のような信仰と、落胆と失望の中でも揺れ動かない感謝と、ユーモアな感覚を与えてください。牧会は失敗しても私の魂は失敗しないように守ってください！」そして、この祈りが悪に満ち、淫乱なこの時代を生きる、尊い神の新婦のようなあなたの祈りになることを願います。状況の奴隸にならず、神の御力で勝利する偉大な神の人になってください。（ハバクク3:17～18、ピリピ4:11～13）†

**幸福な人たち／キム・デイル** 局長

キムデイル局長 ワウシーシーエム (WOWCCM) 代表

## 24時間世界に向かって 賛美と福音が伝播される



今日は、スマートフォンの非ユーザーを見つけるのが難しい時代である。決められた時間と場所に制約を受けるようなTV視聴時代ではない。誰でも、もう一度見たり聞いたりする事が可能なパッドキャスト（アップルのアイパッドーIpodーと放送－Boradcasting－を結合して作った新造語で、ポータブルメディアプレイヤーPMP－ユーザーにオーディオファイルまたはビデオファイル形態でニュースやドラマなどを提供すること）放送の時代である。その草創期にあって早々とその中に飛び込んだ若者がいた。今年で放送14年になるインターネットキリスト教音楽放送、ワウシーシーエム ([www.wowccm.net](http://www.wowccm.net)) キムデイル局長。彼が始めたインターネット基督教放送局ワウシーシーエムを通して世界中に24時間、キリスト教の賛美と福音が流れている。

軍隊に入隊する前、友人の家で遊んでいるとコンピューター関連の雑誌の中に「あなたも、DJになれる」という記事を目にした。これをきっかけとして、除隊の後、自分だけの放送を始めることとなった。

ワウシーシーエム放送は、彼が除隊の後 2003年に始まるが、実際、それ以前の 2001 年から少しづつ放送を趣味で始めていた。ところが放送の中、チャットルームで、ある牧会者の子供の告白を知った瞬間、彼はこの事が人の人生にどれほど重要な影響を与えるかを悟るようになった。牧会者の父との関係が疎遠になった後、家を出て教会から離れることになった青年が 3 年間さまよったあげく、偶然にワウシーシーエム放送を聞くようになり、心から立ち返った事件であった。放送を通して 2 週間、関わった青年は、父との関係を回復し、また教会に受け入れられ、回復を経験した。

### さまよう人々を主に

「事実、キリスト教音楽放送とはいえ、たまに世の音楽も流して自由に自分の好きなように運営したのですが、この事件以後、もう一度、自分の心が新しくなりました。」

疎外されてさまよう人が放送を通して主に心から立ち返るのなら、これこそ時間と空間に制限されない貴重な福音電波の通路となる黄金の収穫場である。それで彼は大学で建築工学を専攻して卒業の後、就職内定となつた安定感のすべてを捨てて広々とした神様の福音の海に浮かんだ福音船であるワウシーシーエムという救いの箱舟を選択した。

あきれ返った両親の反対にぶつかった。二人とも篤実なクリスチャンであり、特に彼の父は今でも主日の教会で車両奉仕に

よって自ら信徒たちに仕えている。このような父は彼のロールモデルでもあった。

「この仕事を絶対すると熱心に説得しました。大学を卒業した後、家に備えたコンピューターですでに放送の仕事をしていました。だからこそ、父は、私には情熱がある。どうせやるなら、死ぬ気でやれと許してくれました。」

以後、コンピューター一台とマイク、何着かの衣類だけを持ってソウルへ上京し、奉天洞の地下室に500万ウォンの保証金で事務所を借りた。500万ウォンは目が飛び出るほどの金額であった。ワウシーシーエム放送には、後援口座があったけれども、1ヶ月に入ってくる後援金は3～5万程度で、多くても10万ウォンであった。この状況の中で500万ウォンという金額はあまりにも大きなものであった。ところが、驚くべきことにワウシーシーエム放送を聞いた聴取者が必要な金額だけ後援金として入金した。これは彼に、神様が示した祈りによるものであった。

「いつも神様は、このような方法で私にサインをくださいました。財源がない、先行きが暗いとき、考えることもできない所に立っても、きっちり必要なだけの財源が、満たされ、ある問題のため、希望をなくしてしまって挫折したときでも、人を遣して私をまた立たせてくださったこと。このような2種のことが常にありました。」

事実、問題はいつもあった。食べるものがなくても、家賃だけは支払うという決心をし、アルバイトまでして何とか家賃を支払うと、空腹のため無力で放送をしたこと。梅雨の季節、奉天洞の地下室が漏水で水浸しになったことから、雨が降るたびに疲れなかつたこと。しかし、空腹のため無力で放送しても、家の前に誰かがお米を配達しておいしいご飯を炊いて食べたこ

と。突然、値上がりした家賃のために行く場所がなくなったとき、農漁村放送宣教をしていたチャジェワン、チェスミン夫婦（俳優チャテヒョンのご両親）がよろこんで席を空けてくださり、農漁村放送宣教とワウシーシーエム放送を兼務したこと。また、独立をしたとき、放送設備が何もない状態にもかかわらず、数人の連絡をしてきた聴取者が設備のため献金してくださったこと。すべて神様の導きであった。

### 韓国、モンゴルと中国、そしてイスラム圏に向かう

現在、ワウシーシーエム放送局がある場所も放送で提携したベテル教会（城北区ソルセム路）パクトナム牧師が教会内に場所を与えてくれた。家賃の問題から前の事務所を引き払わなくてはならなかったワウシーシーエムを快く迎えてくれた。初め賛美奉仕者のDJになってもらおうと会ってみると、軍隊で知り合った先輩であった。この方を通して多くの賛美奉仕者と関係ができて今ではワウシーシーエムは、15個の放送プログラムを運営するようになっている。それだけでなく海外宣教へも地図が広がった。

2007年、偶然、行った教会の短期宣教チームでモンゴルを訪問したのだが、これにより私たちは、さらに他のビジョンを持つようになった。現地でモンゴル語の賛美が一つもないことを知りながら、レコードを出した経験が絶無だったにもかかわらず、神様は、モンゴルのウランバートル大学で韓国語科を専攻するあるモンゴル青年と賛美奉仕者、さらに他の関係者を結び合わせられ、モンゴル語レコード4枚を世に出すにいたつたのである。このようにモンゴルとのつながりから、モンゴルワウシーシーエム放送を始めてから、すでに5年がたった。モン

ゴルに続いて中国ワウシーシーエム放送も運営されている。

「ポッドキャストではモンゴルでの宗教放送中 1位、中国宗教放送では 10 位～ 30 位圏内に私たちの放送が定着するようになりました。すべて神様の恵です。」

10 月にはモンゴルで既存のものとは別に特別な贊美コンサートが行われる。モンゴルワウシーシーエムは多くの若者によく知られていてモンゴルでは公開放送が 2 回予定されている。この過程でも神様は、不足する贊美チームの財源をちゃんと満たしてくださった。長い間、放送を通して恵を受けた方が夫からの相続金を献金したが、その金額が不足する財源にぴったりあつていたこと。

キムデイル局長は、ワウシーシーエムを通して韓国をはじめ、中国、モンゴル、ドイツ、アメリカなど海外いたるところで宣教師、留学生、体と心に障害のある子供や障害のため疎外された人々に会ってきた。彼らに神様の御心を伝えることがワウシーシーエムの使命である。今後、希望があるならイスラム国家にもワウシーシーエムが通路となるであろう。福音の制限される所では、インターネット放送は、国境を越えて、どこでも伝達できる通路となることができるためである。

「イスラム圏の文化、言語に巧みな人を与えてくださいと祈っています。来年には神学も勉強する計画を持っていて今後 10 年間で、海外宣教にキリスト教メディアの境地が広がるビジョンで祈っています。妻も贊美奉仕者 (CCM 歌手オウン) なので一緒に祈っています。」

彼の祈りがモンゴルと中国の門を開けたように、イスラム圏にもワウシーシーエムによる世界への贊美と福音が鳴り響いている。†

## イエス院四番目の講義プロジェクト 統一時代を開く

ベン・トレイ／イエス院理事長、サンスリヨンセンター本部長

### 善をもって 悪に打ち勝つこと



今回をもって、ローマ人への手紙 12 章の默想を締めくくります。これまで、信仰の通りに仕えること、愛をもって仕えることは、どういう意味かを学びました。これらすべては、神の人たち、聖徒たちによって構成された共同体に焦点を置くことです。ところが、最後の部分は、信仰の共同体を超越して、悪、——この世の悪に負けず、善をもって悪に打ち勝ちなさいと最後の勧告のもと、私たちを世間へと導きます。17 節から始まる最後の部分において、使徒パウロがその前に述べた概念に、世間を含めていることがわかります。

「だれに対しても悪をもって悪に報いず、すべての人に対して善を図りなさい。」(ローマ 12:17)

この箇所において、使徒パウロは共同体を超えて世間を見るようにと、私たちを招きよせているということが、二つの言葉によって明確に示されています。誰に対しても悪をもって悪に報いてはならない、と同時にすべての人に対して善を図りなさいと勧めます。ここに書かれた「だれに対しても」と「すべての人には」という二つの言葉が、私たちの態度と行動は共同体の外にいる人々に対して関連があるということを示す、重要な鍵です。

この箇所は、先月学んだ14節の御言葉「あなたがたを迫害する者を祝福しなさい。祝福して、のろってはならない」と似ています。しかし、この御言葉は、共同体の中で、常に私たちを反対する人に対する私たちの行動の有り方について述べている点が異なります。ところが、17節では、共同体内における私たちに対する悪を受け入れ、呪いや復讐、それ以上のものへと導きます。家族や共同体の肢体にこのような態度を取ること、肉的にも靈的にも何の関係のない人たち、何の義務感のない人たちに、このような態度を取ることは、非常に異なります。

いかなるかたちにせよ、私たちを傷付ける共同体の外の人たちの一般的な反応は、やり返そうとしたり、彼らと同じように傷付けようとしたりするからです。しかし、私たちは、そのようにしてはいけません。実際、ギリシャの「プロノエル(pronoel)」という言葉が示すように、世間——すべての人——が見るに、どのようにすることが善を図ることなのか、考えてみると勧めたことがあります。私たちの本性的な反応は、怒りになるかもしれません。しかし使徒パウロは、そういう反応ではなく、自身の思考や行動を注意深く考察し、すべての人が正しいと思われることを選びなさいと勧めています。この文を書きながら、キリスト者、ないしはキリスト教的教えではないキリスト教に対し、異邦人からどれほど非難を受けてきたか、考えてみました。世間は何が正しいかを知っています。他の人たち——当然、基準が何かを知っている人たち——さえもそうします。御言葉を基準にして——御言葉に従って——生きることは、私たちの選択によります。

次の御言葉は、それが何を意味しているか要約しています。  
「あなたがたは、できる限りすべての人と平和に過ごしなさ

い。」(ローマ 12:18)

私たちは、すべての人と平和に暮らすことを追い求めます。しかし、パウロは、これが常に可能でないことを認めています。ある人と平和を保ち合うためには、彼らもやはり、私たちとの平和を願わなければなりません。不幸にも、それを願わない人たちがこの世には多くいます。だからといって、これが弁明にはなりません。他の人と和解するためには、悪をもって悪に報いず、すべての人に善を図れる方法を考えなければなりません。

次の御言葉はこのことをより強い語調で述べるとともに、なぜこれが正しいかを示しています。正義は、悪行に対して正当な対価が支払われることを要求します。そうです。その通りです。しかしそれは、私たちがやるべきことではありません。神がなさることです。

「愛する者たちよ。自分で復讐をしないで、むしろ、神の怒りに任せなさい。なぜなら、『主が言われる。復讐はわたしのすることである。わたし自身が報復する』と書いてあるからである。」  
(ローマ 12:19)

使徒パウロは、非常に深刻に勧告を繰り返します。けれども、私たちの苦境に対し、無神経に忘れてしまうことではないということを知ってほしいのです。彼は仇を討つことについて話しています。しかし、復讐を神に任せなさいと勧めつつも、「愛する者たちよ」と私たちを呼んでいます。彼がそのように勧告する理由は、私たちを愛しているからです。実際に傷つけられた時、同じように相手も傷付いてほしいと願うのが、正義が要求するところです。

しかし、パウロは、すべての正義は神の御手から出るものであり、すべての復讐は、神、ただおひとりだけに属するものだ

と思い起こさせています。私たちは神に属しているため、神は私たちに加えられた悪行を、いかなる方法によっても必ず報いてくださるはずです。けれども、この復讐は私たちではなく、神がなさることです。実際、私たち自ら復讐しようとすると——私たち自身の小さな努力以上のいかなるもので復讐しようとすると——それがかえって、神がなさろうとされることの妨害となります。神の正義と慈悲によって報復する、その時がきっと来るはずです。

しかし、事実上、私たちに加えられた悪行は、すでに十字架で流されたキリストの血によって支払われました。この事実——サタンの手の仕業から、罪の重荷から私たちを買い取られたという事実——を受け入れた人は、これによって、兄弟姉妹となつたのです。彼らは、もはや私たちの敵ではありません。セバステーの40人の殉教者の話が思い出されます。AD320年、40人のローマカトリック信者である軍人は、主イエスを否認しなかつたという理由で、裸にされたまま、凍り付いた湖に投げ出されました。彼らが逃亡しないよう監視していた他の軍人が、キリストに対する彼らの献身に感銘を受け、自分自ら服を脱ぎ、凍り付いた湖の中に入り、彼らと共に亡くなりました。彼は、他の人——殉教した人たち——を苦しめたことに対する報いかもしれません。しかし、その報いは神の御国に入った時、彼の栄光の冠となるのです。

実際、私たちは復讐をしないばかりか、パウロが箴言の御言葉を引用したように、敵への愛を示さなければならぬのです。

「むしろ、『もしあなたの敵が飢えるなら、彼に食わせ、かわくなら、彼に飲ませなさい。そうすることによって、あなたは彼の頭に燃えさかる炭火を積むことになるのである』。(ローマ

12:20)

この箇所は、善を行なうことによって、敵を苦しめる方法で報いなさい、という意味ではありません。むしろ、神の強い御力が働かれるよう、その座を差し出してあげる時、彼らは罪を悟れるようになるという意味です。聖霊がその人を悟らせる時、頭に燃え盛る炭火を積むことになります。聖霊が悟らせてくださると、苦しくなります。しかしこれは、栄光をもたらす苦痛です。この燃え盛る炭火は、私たちのすべての罪惡——敵のすべての罪惡——を燃え尽くし、貞潔と救いをもたらす『聖霊の火』となります。敵に対して善を行なう時、神の慈悲にさらに近づくようになり、その神の慈悲が新しい命を与えてくれます。私たちは神が働くよう、空間を提供するのです。

そして遂に、ローマ人への手紙12章は、21節に書かれた最後の勧告に要約されます。

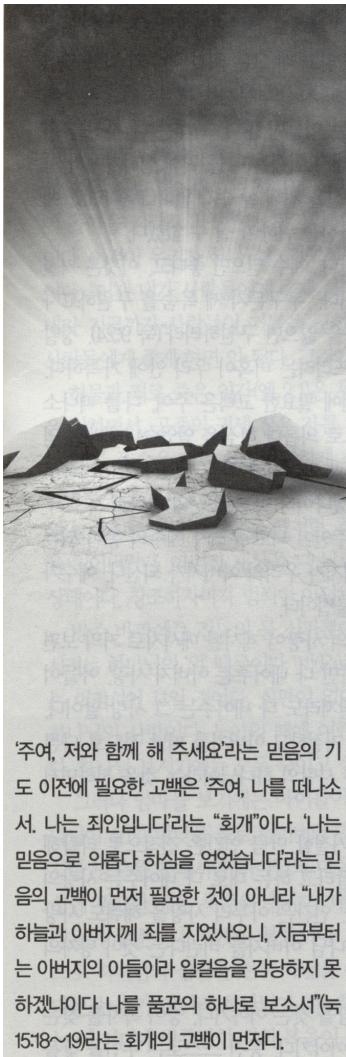
「悪に負けてはいけない。かえって、善をもって悪に勝ちなさい。」(ローマ12:21)

私たちは、神の恵みによって、この世のあらゆる悪より強いのです。キリストの血潮によって清められ、聖霊の力が注がれています。また、悪に打ち勝ち、勝利の人生を生きるよう、信仰と賜物が与えられました。勝利しながら生きるように、すべての人が見るに善い事を行ない、この世の悪が私たちに勝つではなく、私たちが悪に打ち勝つように、私たちは召されたのです。そうする時、このローマ人への手紙12章の御言葉通りに生きる時、これ以上この世に囚われることなく、区別できるように変えられた時、私たち自身——私たちの体や靈魂、心や考え方——を神に捧げる時、私たちは悪に打ち勝ち、神は栄光をお受けになるのです。皆さん、このように生きましょう。†

世の終わりの日まで

ソン・ヒョンギョン 牧師 アメリカ・ニュージャージ・ゴスペル・フェローシップ教会

## 福音には 「神の義」が啓示されている



「神は愛である。神はあなたを愛しておられる」と語り、私たちは神の愛を体現しようと努力する。神の愛を見れば、神を知らない魂が主に立ち返れると考えるからだ。この世は、つねに愛を追求する。だから小説や映画の俳優は変われども、ストーリーはいつも愛が主題である。

人間は死ぬまで愛を求め続ける。全人類が望む愛は、自分が受けたいと思う愛だ。自分が愛を与える相手を捜すのではなく、自身が愛されたいと願う、その愛を追求している。それは、神の愛、すなわちアガペ(Agape)の愛ではない。聖書に一度も記されたことのない愛、つまりエロス(Eros)の愛だ。私たちは、「君は愛されるために生まれてきた」と歌い、神を知らずに拒んでいる魂を信仰に導こうと努めている。

しかし、聖書全体を通して神が罪人たちに伝えようとしているメッ

セージは、「わたしを信じなさい」ではなく、「わたしに立ち帰りなさい」という『悔い改め』のメッセージである。だから、使徒パウロがローマ教会に宣べ伝えた福音に、「神の義は、その福音の中に啓示され」(ローマ 1:17)と記されている。そして「神の怒りは、不義をもって真理をはばもうとする人間のあらゆる不信心と不義とに対して、天から啓示される」(ローマ 1:18)という御言葉につながる。神の義が啓示される時、罪人は罪を悟り悔い改めることができる。

実は、悔い改めと信仰は分離することができない。新生とバプテスマも分離できないものである。だが、実際にはそうではない。イエス・キリストが神の御子であると信じ、キリストの血潮によってすべての罪が赦されたと告白しながらも、主のために生きるのではなく、自身の問題解決のために、この世の安定のために、主イエスの助けを請い求めながら一生を送る人が多い。悔い改めとは、自分のために生きることは罪であると悟ることにほかならない。私のために十字架の上で命をも捨てられたイエス・キリストを信ずるならば、もはや自身のために生きることはできない(Ⅱコリント 5:15)はずだ。

それにもかかわらず、私たちは「自分のためにイエスを信じて!——イエスを信じれば祝福を受ける」と語る。これは偽りの福音だ。自分の命を救おうとする者は命を失うからである。「自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのために自分の命を失う者は、それを救うであろう」(ルカ 9:24)。本当に今は終りの時代である。神に選ばれ召された者をも倒そうとする誘惑が、私たちのうちに満ちている。「主よ、私と共にいてください」と祈る前に、「主よ、私から離れてください、私は罪深い者です」という『悔い改め』の祈りが必要だ。「私は信仰によって

주여, 저와 함께 해 주세요라는 믿음의 기도 이전에 필요한 고백은 '주여, 나를 떠나소서. 나는 죄인입니다'라는 "회개"이다. '나는 믿음으로 의롭다 하심을 얻었습니다'라는 믿음의 고백이 먼저 필요한 것이 아니라 "내가 하늘과 아버지께 죄를 지었사오니, 지금부터는 아버지의 아들이라 일컬음을 감당하지 못하겠나이다 나를 품꾼의 하나로 보소서"(눅 15:18~19)라는 회개의 고백이 먼저다.

義とされました」という信仰告白が必要なのではない。「立って、父のところへ帰って、こう言おう、父よ、わたしは天に対しても、あなたにむかっても、罪を犯しました。もう、あなたのむすこと呼ばれる資格はありません。どうぞ、雇人のひとり同様にしてください。」（ルカ 15:18～19）という悔い改めの告白が先だ。イエスが私たちの主人となり、私たちがイエスの僕となることが悔い改めだ。そしてこそ、主イエスを遣わした天の父が、私たちの父となられるのだ。イエスを『主』とは認めずに神を父と唱えることはできない。

放蕩息子のたとえ話は父なる神の全き愛を示すものだ、というメッセージが一般的である。息子が財産を要求すればすべてを惜しまず与えてくれる愛、——息子が願う、まさにその愛、——父との関係が断ち切られてもすべてを差し出してくれる、その愛だ。ところが、そのような愛を受けながらも、愛の父を拒み、父から離れ去って行く悪い息子についてのメッセージは伝えない。良き愛の神であると伝えながらも、悪い息子であるとは伝えない。すべてのものを差し出してくれる父の愛を拒むほどまでに、人間は堕落し、完全に腐敗してしまった。人間はどんなに愛されていても、愛そのものを拒むほどに悪い存在だ。罪人は、愛されているにもかかわらず父なる神を捨てる、これが放蕩の息子の比喩が示していることである。そうした存在は、愛によっても主に立ち帰ることはできない。

主イエスがその日に伝えられた比喩は三つある。第一に牧者が羊を捜す話だ。羊が牧者を捜すという表現は全くない。第二の比喩は、失くした銀貨の話だ。銀貨自らは主人を見つけることができない。死んでいる命だ。第三の比喩は、放蕩息子の話だ。放蕩息子は父親を捨てて縁を切った。これは罪と咎のゆえ

に死んでいる状態だ。最初の比喩で、羊はまだ死んでいなかった。この世で遊んでいるだけだ。第二の比喩における銀貨は、死んでいる。主人によって動かされない。第三の比喩の放蕩息子は父親を捨て、自分の中で父を殺してしまった。これほど人間は悪い。これが『悔い改めの福音』だ。

それでも私たちは、放蕩息子のように失われた魂を主に立ち帰らせるために、御子とともにすべてのものを差し出される、父なる神の愛だけを伝えている。その愛を味わえば、罪人も戻ってきててくれるだろうと仮定する。放蕩息子の比喩が与える教訓とは正反対の結論を下す。これは偽りの福音だ。これは私たちが神を喜ばせようとするのではなく、人を喜ばせようとする証拠となる。「今わたしは、人に喜ばれようとしているのか、それとも、神に喜ばれようとしているのか。あるいは、人の歓心を買おうと努めているのか。もし、今もなお人の歓心を買おうとしているとすれば、わたしはキリストの僕ではあるまい」（ガラテヤ 1:10）。人々の歓心を買おうとしてはいけない。それは結局、人々を愛することとはならない。

咎と罪のゆえに死んでしまった人間（エペソ 2:1）は、世の風俗（Course）を追求するために、父親の財産を要求しながらも、空中の権をもつ君に従うために父親を捨てた（エペソ 2:2）。彼は世の風俗に従って放蕩したので、神が差し出されたすべてのものを失ってしまった。父親なしに与えられたものは、サタンに奪われるしかない。エバが神に寄り頼まず、自身の能力によって蛇と対話した時のように、エバは神の約束を忘ると同時に、エデンの園を失ってしまった。親の財産をすべて使い果たした放蕩息子の如く。これが、福音が示す堕落した人間の状態だ。創造とともにすぐに罪を犯してしまうアダムと、新約時代の放

蕩息子とは全く同じ状態だ。

箱舟の外にあるのは、神の御怒りによる水の審判のみだ。箱舟を作るよう命じられた理由は、水によって裁こうとされる神の『義』のゆえだ。雨 (Rain) というものがなかった時代に、箱舟そのものが人間の目には愚かに見えたかもしれない。——審判がないならば。しかしながら、神の審判があるため、箱舟は神の御愛となつた。ノアの時代、子どもから大人に至るまで、すべての人が邪悪であった。神の目から見て、すべてを滅ぼしたいほどまでに。

しかし父の目から見れば、本来、子どもたちはいかに愛らしい存在だったことだろうか。それにもかかわらず 40 日間すべてを水で覆うほど、神の御怒りは極限に達し、それを人間は自ら知る余地がなかった。ノアによって啓示された箱舟を通してのみ、神の御旨を知ることができる。神が裁こうとされるこの世に必要なのは、暴雨と洪水を予告する夢と啓示ではなく、ノアが箱舟を一生懸命作る姿を学ぶことだけだ。これが福音である。愚かに見える福音が伝えられなければ、人間には自ら神の審判を悟ることができない。彼らに必要な情報は、神が愛しておられるという知らせではなく、神の御怒りが極致に達しているという義のメッセージだ。愛が洪水のように溢れるこの時代に、果たして箱舟ほどの小さな義の福音が目に付くだろうか。†

---

発行：純福音東京教会・出版部

【翻訳】：諸星健児 執事、林俊秀教育生、間杉綾乃 執事、李珍 執事、山野永理 助士、  
趙芝賢 伝道師、澤田義則 執事、金景娥 執事、朴宰完 按手執事、金澤由紀子 助士

【日本語校正】：諸星健児 執事、松谷恵理 執事、間杉綾乃 執事、金澤由美 姉妹、吉田綾子 執事、  
笠原幸子 執事、武石みどり 執事、向川誉 執事、澤田義則 執事

【印刷・製本】：間杉典生 按手執事

【再編集】：金澤由紀子 助士

---